



大震災（津波）について

1995/1/17 阪神淡路大震災から31年、当時私は新任6年目、悲惨で悲しい様々な場面を思い出します。きっと保護者様も、あの大地震の衝撃と被害に遭われた方への思いは同様だと思います。私は昨年度、岩手へ出張があり、その帰りに宮城から岩手の海沿いの街を訪れ、2011/3/11 東日本大震災の遺構を見て、被災された方から話を聞きました。死者18131人、行方不明者2829人、その一人ひとりに人生があり、家族があり、過酷な現実があり、理不尽な悲しみを強く、切実に感じました。その内の宮城県南三陸町で聞いた話の一部を紹介します。

【防災対策庁舎（今：広大な空き地の中、鉄骨だけとなった遺構）】

高さ12mの防災の司令塔の庁舎で危機管理課の24歳の遠藤未希さんが高台への避難を何度も呼びかけ、その声があまりに鬼気迫りしつこいので、住民は渋々高台に避難し、結果的に沢山の方が助かった。この事は新聞等で「天使の声」と紹介された。遠藤さんが30分間で44度呼びかけた後、上司の三浦毅課長補佐が「未希ちゃん上へ上がれ！私が放送すっから」と説得し、替わって呼びかけを続けた。三浦さんの声は14度目に途切れ、防災対策庁舎には15.5mの津波が襲い、屋上に逃げた遠藤さんを含め、役所、警察、消防、住民たち43人が亡くなられた。報道された遠藤さんの「天使の声」は有名だが、三浦さんの事はあまり知られていない。（語り部は涙を浮かべながら）皆さんが是非、遠藤さんとともに三浦さんの勇気をも、後世に伝えてください。

【戸倉小学校（今：校舎も付近の150世帯の家もなくなり、草のみの広大な空地）】

校舎は海に近い高台にあり、学校の地震マニュアルでは避難場所は屋上だった。数日前にある先生が「屋上で大丈夫か？」と投げかけていて、校長は遠くの山上への避難を決断し、児童教員100人を走らせた。その後小学校は丸ごと津波に飲み込まれたが全員無事。その夜、山の上で焚火を囲み、過ごした。不安で怖がる低学年を励ますため、練習していた卒業式で歌う「旅立ちの日に」を高学年が朝まで歌い続けた。夏に、被害を免れた近隣の小学校で半年遅れの卒業式。歌手の川嶋あいさんが来校し、川嶋さんの伴奏で「旅立ちの日に」を一緒に合唱した。

【戸倉中学校（今：校舎は公民館に、校庭は空地、止まった時計、教室の黒板には翌日の卒業式の予定が記載）】

小学校よりかなり高台にある。そのため、安心していて、地域住民も中学校に避難してきた。しかし、津波は海側から何波も襲ってきて、反対側からも川や沢を登って山から戻ってきた。合流した津波は想定を遥かに超え、22m以上になった。避難していた住民11人と中学生1人が亡くなり、その人たちを助けに行った先生が1人亡くなった。家が流されたけど無事だった人々は、町に高台が少ないため、悲しいことに、沢山の人が亡くなられた校庭に仮設住宅を建てて、数年間、過ごした。 [中2男子] 学校は海拔20m。しかし地震40分後、津波は校庭に押し寄せ「そんなばかな!」。急いで友だちと山林の斜面を駆け上がると、2方向から来た津波は合流し体育館の2階以上に。逃げ遅れて津波に飲まれた男性を、靴に入れていたジャージを使って引き上げ、授業で習った心臓マッサージや人工呼吸を試みた。しかし亡くなってしまい、6人で木陰に運んだ。男性は大量に水を飲んでいて、めちゃくちゃ重かった。その後、高台の工場に移動すると、津波に飲まれ低体温症の男性が運び込まれた。布団の中で先輩と両サイドから1時間温め、さすり続けて一命をとりとめ、安堵した。さっきの人は助けられなかったから…。

【印象に残った言葉（宮城県南三陸町、岩手県陸前高田市）】

- ・昔から地元に残る言葉＝「津波てんでんこ」（津波発生時は、てんでばらばらでいいから逃げろ!）
- ・[中2女子]「100回逃げて100回来なくても、101回目も必ず逃げて!」
- ・多くの被災者＝「大切な人を亡くした夜、地震や津波によって停電した真っ暗闇から見る異様に綺麗な星空は一生、目に焼き付いている。亡くなった人は、あの星々になったのだと思った」